

## キェルケゴールの 1848 年の信仰的突破について

鈴木祐丞

### 1. はじめに

1852 年、キェルケゴールは日誌に次のように記した。

…そうして 1848 年がやってきた。それが救いとなった。私はもっとも高いもの [det Høieste] を理解したと、祝福に圧倒されて、あえて自分自身に言った。そうした瞬間がそこで私にやってきた (Pap. X4 A 545.)。

本稿は、この記述のうちに暗示されている、1848 年に生じてキェルケゴールにとって「救い」となった「瞬間」を「キェルケゴールの 1848 年の信仰的突破」\*1 と称し、それが具体的にどのようなできごとであったのか、ひとつの可能な解釈を提示する。

キェルケゴールの著作・思想の全体は、本質的には、罪のゆるしの信仰とは何か、いかにしてそこへと至りうるかを究明したのものとして捉えられるべきであると思われる。そして罪のゆるしの信仰についてのそうした思想的表現は、罪のゆるしの信仰を求めてのキェルケゴール自身の内面史的展開を背景にもつものと考えられる\*2。

キェルケゴールの 1848 年の信仰的突破についての本稿の研究は、キェルケゴールの生と思想についてのこのような見通しのもとになされる、彼の内面史的側面についての研究の一端である。詳しくは後述されるが、上述の「救い」の「瞬間」(信仰的突破)とは、キェルケゴールが罪のゆるしの信仰へと実存的に到達したことを言う。そのようなものとして信仰的突破は、彼の内面史全体における核心的なできごとであると同時に、罪のゆるしの信仰

\*1 「信仰的突破」という用語は、(橋本淳 1976, p.209) から借用した。

\*2 このような見解にたつ先行研究として、(橋本淳 1976, 1991) などが挙げられる。

の究明を目指した彼の著作・思想の本質的な理解のためにも決定的な重要性を持つべきことなのである。

キェルケゴールの著作からの引用は『原典全集』（第三版）を、また日誌からの引用は『日誌・遺稿集』（第二版）<sup>\*3</sup>を用いた。邦訳はすべて論者によるものである。

## 2. 1848年の信仰的突破

以下、2-1 から 2-4 において、当該時期のキェルケゴールの日誌を時間軸に沿って辿ることにより、信仰的突破の全体像についてのひとつの可能な解釈を提示する。あらかじめその全体像を要約しておけば、次のようになる。

1847年5月5日、キェルケゴールは不可能と目されていた34歳の誕生日を迎え、それに伴って罪についてのより深い理解に到達し、自らの従前の状

---

<sup>\*3</sup> キェルケゴールは、遺稿が自らの死後に出版されることを予期しており（*Pap.* XI A 239.）、同時に、自身の生と思想は死後になってはじめて理解されるものと予見していた（*Pap.* VIII 1 A 116, 424）。これらのことを考え合わせれば、遺稿はキェルケゴールの本質的な理解のための第一級の資料として、積極的に用いられるべきであると考えられる。しかし研究資料としての遺稿の妥当性を巡っては、いくつかの問題点が指摘されるのが常である。そうした問題点についてここで考えておくことにする。問題点を大別すれば、以下の二系列となるであろう。

- 1) 遺稿の編集のされ方に端を発する問題（『日誌・遺稿集』の各版が、遺稿のオリジナルな配列をどれだけ再現できているのか）
- 2) 遺稿自体に内在的な問題（遺稿の内容にはさまざまなフィクションが混入しているのではないか）

これらの問題に対して、本稿は次の立場をとることにする。

- 1) 遺稿全体のうち、日誌 NB4 から NB6 までが本稿が用いる資料であるが、それらはもともと一冊ごとに綴じられたノートであることから、編集方法に端を発する配列の問題は、少なくとも本稿の研究においては生じないと考えられる。なお、SKS の出版により、この系列の問題は解消へ向かうものと考えられる（カペロン他 2003 参照）。
- 2) 遺稿のうちには部分的にフィクションも混入しているかもしれないが、そのフィクションとは事実の捏造という種類のものではなく、事実の脚色という種類のものであると考えられる（*Pap.* X5 A 146.）。そこで、遺稿の内容について、そこに書かれた事実は脚色されている可能性があるものの、その事実の存在自体については疑う必要はないものと思われる。

態を「絶望の罪」(*Pap. IX A 341.*)として認識するようになる(2-1)。その後さまじまな苦悩の末、キェルケゴールは1848年4月19日に「私の本質全体は変化した」で始まる日誌(*Pap. VIII 1 A 640.*)を記し、内閉性という内面的状態を打ち破って牧師になることを目論むが、その試みは座礁する(2-2)。キェルケゴールは内閉性・憂愁とは「絶望の罪」の一形態であることに気づき、その解決には罪のゆるしの信仰が必要であることを知る。罪のゆるしの信仰は「反省のあとの直接性」(*Pap. VIII 1 A 649.*)という弁証法的なものとして理解され、反省のあとに戻るべき直接性がどのようなものか考察が続く(2-3)。そしてあるがままの状態(「絶望の罪」としての内閉性・憂愁)が摂理のもとにあるものとして肯定的に捉え返された状態こそがそれであると理解され、同時にその状態へとキェルケゴールが実存的に至ったとき、信仰的突破(罪のゆるしの信仰への実存的到達)が生じることになる。なお、信仰的突破は1848年6月下旬から7月上旬(*Pap. IX A 64-75.*)に生じたできごとであった(2-4)。

## 2-1 信仰的突破への序章

キェルケゴールは1847年5月5日、34歳の誕生日を迎えた。キェルケゴールにとって34歳とは不可能な歳であるはずだった。父により犯された罪(「少年の日の神に対する呪い」、「二度目の結婚にまつわる忌わしい秘密」橋本淳1976, p.87)が家族全体を覆い、キェルケゴールの兄弟姉妹は誰も、キリストが十字架につけられた33歳という年齢を越えて生きることができないはずだった(*Pap. VIII 1 A 100.* および「大地震」体験に関連する *Pap. II A 805.* 参照)。

このように考えられていた34歳を無事に迎えたことに伴って、キェルケゴールは罪についてのより深い理解へと到達したものと思われる。1847年5月付近に、次のような日誌記述が存在する。

最初、人間はおそらく、弱さ [Svaghed] から罪をおかす、弱さに屈服する(ああ、というのはおまえの弱さは、まさに欲望の、性向の、

情熱の、そして罪の力だからである)、しかるにそこで、彼はそのことにかんしてかくも絶望し、そうして彼は、おそらくふたたび罪をおかす、絶望から罪をおかす (*Pap. VIII 1 A 64.*)。

#### 罪のふたつの形式

1) 人間は弱さから罪をおかす。

2) そうして絶望から罪をおかす。これが本来的な罪である。

ここに、したがって贖罪もまた存する。人間は、彼が弱さからかかわった罪がゆるされうるということにかんして絶望する、彼はすべてが失われたと考える、そうして彼は罪をおかす。したがって、彼を止まらせるためには、贖罪がなければならない (*Pap. VIII 1 A 497.*)。

これらの日誌の内容は、最終的に 1848 年末の次の日誌記述のうちにまとめられている。

私がほかのところ [VIII 1 A 64, A 497.] で示したように、罪のふたつの形式が存する。弱さの罪 [Svagheds Synd]、そして絶望の罪 [Fortvivlelsens Synd] である、ひとは、彼が弱かったことにかんして、あるいは、罪をおかすに十分なほど弱いことにかんして、絶望から罪をおかす。この後者の形式が、明確な罪である。それについてこそ、したがってキリスト教はまた、狙いを定めてきたのである。というのは、贖罪についての教義は本来的にこの絶望に関係しているからであり、贖罪はこの絶望を終わらせようとするのである。そうした人間だけが、本来的に贖罪を把握するのである、すなわち、それに対する願望を持つのである (*Pap. IX A 341.*)。

キェルケゴールは罪を、人間の自然的性向によりおかされる「弱さの罪」と、弱さの罪がゆるされないものとする「絶望の罪」に分け、後者こそが本来的な罪であると見なすようになるのである。

キェルケゴールがこうした罪の理解へと到達したのは、彼が不可能なはずの 34 歳を迎えたできごと起因しているのではないかと思われる。すなわ

ち、キェルケゴールは、父の罪（「弱さの罪」に相当する）をゆるされないものと見なしてきたからこそ 34 歳は不可能と考えてきたのであり、34 歳を迎えたことによって、父の罪をゆるされないものと見なしていたこれまでの状態を客観的に見つめなおすことができるようになり、そしてそうした状態こそが本来的な罪（「絶望の罪」）であると気づくようになったのではないかと思われるのである。

## 2-2 信仰的突破への胎動期 (1) 内閉性の打破、牧師となる試みとその座礁

こうして 1847 年 5 月 5 日に 34 歳を迎えたキェルケゴールであるが、1848 年の 4 月まで、さまざまな要因によって苦悩の状態のうちにあったと考えられる。たとえば、作家をやめて牧師になることを目指しながらも、憂愁（その根源は上述の父により犯された罪と考えられる。（橋本淳 1976, pp. 86-87）参照）や内閉性（内面的には憂愁でありながらそれを隠そうと外面的には快活を装う状態。SV3 15, 118. 参照）という自らに支配的な気質のために断念せざるをえなかったこと（*Pap.* VII 1 A 221. 参照）、コルサァー事件の影響が続いていたこと（*Pap.* VIII 1 A 42. 参照）、経済的な苦境（*Pap.* VII 1 B 211. 参照）、かつての婚約者レギーネが 1847 年 11 月に結婚をしたことなどである。

1848 年 3 月の日誌記述から、キェルケゴールがこのような苦悩の状態を打開する道を模索していたことが知られる（*Pap.* VIII 1 A 604. 参照）。そして同年 4 月 19 日、次のように日誌に記すことになる。

私の本質全体は変化した。私の隠蔽性 [Skjulthed] と内閉性 [Indesluttethed] は破られた—私は語らねばならない（*Pap.* VIII 1 A 640.）。

ここでキェルケゴールは、直接的には経済的な状態の悪化という事態をきっかけに、憂愁と内閉性を克服して牧師になることを決意しているのである（「いま、もし私が神の助けによって私自身になるならば、…そのときには私は牧師になるだろう。…あらゆることが…私が私の生計のために嘆かね

ばならなくなったときに、神の助けによって、打ち破ることに寄与してきたのである」*Pap. VIII 1 A 641.*)。

しかし、この決意は4月24日には翻されることになる。

否、否、私の内閉性はやはり止揚されることはできない…。もし負わされているこの内閉性を私が持たないならば、私は公人〔牧師〕になることができるであろうに。いまやそれは困難である (*Pap. VIII 1 A 645.*)。

4月19日の決意は、「内閉性を止揚することをたえず考えることによって、それを止揚しようと欲するという…形式的な方法」(*Pap. VIII 1 A 645.*) だったのである。内閉性というキェルケゴールに支配的な状態は、そのような形式的な方法によっては解決されるものではなかった。

### 2-3 信仰的突破への胎動期 (2) 「反省のあとの直接性」の模索

キェルケゴールはそこで、内閉性の打破と牧師への決意、そしてその座礁というこのできごとをきっかけに、形式的ではない方法による内閉性の解決を考えるようになる。そして、そのためには罪のゆるしの信仰が必要であることを理解するようになる (*Pap. VIII 1 A 645.* 参照)。なぜなら、内閉性とは上述の「絶望の罪」(*Pap. IX A 341.*) の一形態と考えられるからである。

「絶望の罪」は、『死に至る病』第2編B「罪の継続」のなかの、A「自己の罪にかんして絶望する罪」およびB「罪のゆるしについて絶望する罪」に対応するものと考えられる (SV3 15, 156-73.)。そしてA「自己の罪にかんして絶望する罪」とは、「…自己自身に閉じこもることだけを欲する [...den vil kun...slutte sig inde med sig selv...]」(SV3 15, 160.) ものと言われる。これらを考え合わせたとき、内閉性 [Indesluttethed] とは「絶望の罪」のひとつであるという理解が成り立つ。キェルケゴールにおいては、父の罪（「弱さの罪」に相当）を決してゆるされないものと見なすことで生じた内閉性・憂愁が「絶望の罪」である。

キェルケゴールはそこで、罪のゆるしの信仰とはどのようなものか考察を進め (*Pap.* VIII 1 A 646-648. 参照)、それは「反省のあとの直接性」<sup>\*4</sup> (*Pap.* VIII 1 A 649, 650.) であるという結論に到達する。ここで「反省のあとの直接性」としての罪のゆるしの信仰は、ひとまず次のように理解されている。

…罪のゆるしの信仰とは、時間において罪が神から忘れられるということ、神が忘れるということがほんとうに真実であるということを感じることなのである (*Pap.* VIII 1 A 649.)。

しかしすぐに、このような「反省のあとの直接性」の理解がじつは不可能であることに気づく。

…どの直接性へと、それ [「反省のあとの直接性」としての罪のゆるし] を信じている者は戻っていくのか…あるいは、この信仰のもとに続く直接性とは何か…。私はそこで、ある人が、神が文字通り彼の罪を忘れたということ、真実に信じるだけの巨大な信仰の勇気を持ったと想定してみる…神についての発展した観念を持ったあとで、神がまったく文字通り忘れるという、このことを信じる勇気。…それでどうなる？ …不可能だ！ (*Pap.* VIII 1 A 663.)<sup>\*5</sup>

キェルケゴールはそこで、「反省のあとの直接性」としての罪のゆるしの信仰とは真実にはどのようなものか、再考する（「…すなわち信仰の弁証法的な規定についてこそ…私のすべての強さを集中させねばならないのであ

<sup>\*4</sup> 「反省のあとの直接性」は、研究史上おもに「第二の直接性」と呼ばれてきたものであり、(武藤一雄, 1967)、(大谷長, 1953) などにおいては、「受け取りなおし (Gjentagelse)」の概念とほぼ同義のものとして意味づけを与えられている。本稿では、ひとまずこの時期の日誌だけを資料として、この概念がどのような意味合いのものとして理解されうるかを解明することを目指した。著作や先行研究を用いた、この概念についての正確な分析は別の機会に行うことにしたい。

<sup>\*5</sup> *Pap.* VIII 1 A 663, 673. はともに、『日誌・遺稿集』(第二版) 第 8 巻末の *Løse Papirer* に収められており、それらが書かれた時間的な位置づけが正確には不明とされるものである。本論においては、それらはともに *Pap.* VIII 1 A 650 以降に書かれたものと仮定して用いる。

る」*Pap. IX A 11.*)。そしてキェルケゴールは次のような理解に到達する。

…私が信仰を有しているか否か、それについて私は直接的な確実性を得ることはない——というのは信じることは、まさにこうした弁証法的な浮遊 [*Svæven*]、絶え間ないおそれとおのきのうちで、それでもけっして絶望をしない、弁証法的な浮遊だからである。信仰とはまさにこうした無限の自己の心配 [*Selvbekymring*]、全てを賭けるということのうちに人を注意深く保持する無限の自己の心配であって、人がまた現に信仰を有するか否かについてのこうした無限の自己の心配なのである——そして見よ、まさにこうした自己の心配こそが信仰なのである (*Pap. IX A 32.*)。

罪のゆるしの信仰は、そこへと至っていない人間にとって、まったく未知の何かであらざるをえない。罪のゆるしの信仰を求める人間がなしうるのは、おそれおののいて「弁証法的な浮遊」のなかをゆくこと、自分が信仰を有しているかどうかについて「無限の自己の心配」を行うことにとどまるのであり、不確定な「賭け」なのである。こうして、未知の何かである罪のゆるしの信仰を、たとえば「時間において罪が神から忘れられるということ」(*Pap. IX A 649.*) というふうに、予知することはできないのである。

ここでキェルケゴールは、「反省のあとの直接性」としての、弁証法的な罪のゆるしの信仰の獲得において、人間はただその弁証法の方の道（「反省」）を行きうるのみであると痛感したのである。罪のゆるしの信仰の弁証法の「往相」（罪意識の深化にともなう自己否定）と「還相」（罪のゆるしによる自己の再生）（武藤一雄 1967, p.100 参照）のうち、人間の力で可能なのは、「往相」を往きつくすことのみであることを体感したのである。罪のゆるしの信仰へ向けての人間の側からの接近は、ここで限界に突き当たらざるをえない。罪がゆるされること、「直接性」への帰還、「還相」は、神の手に委ねられる。次の日誌記述が、キェルケゴールがおそらくこうした意識のうちにあったことを裏付ける。

…人間は本来的に、悪くなること以上のことをできないこと、そして神はそれに対し、善くなること以上のことをできないこと、こうしたことは本来的に、そこにおいて人間が安らうことのできる唯一の思想である。おお、負債に対するすべての自己の心配の不安の背後で…人間は神なしに世界にいるのではないということ、神が…愛とともにいるということ、こうした想定や確実さが現われ始め、輝き始めるのである (Pap. IX A 34.)。

罪のゆるしの信仰を求める人間は「負債に対する自己の心配の不安」を往く。そしてその背後で、神の存在が「輝き始める」。「直接性」への帰還、「還相」の開始である。そして「還相」においてはじめて、信仰の「確実さ」が「現われ始め」るのである。ここまで到達したキェルケゴールにとって、罪のゆるしの信仰は間近に迫っていた。

#### 2-4 信仰的突破

信仰的突破への胎動期 (2) の時期に、次のような日誌記述がある。

祈りにさいしてアーメンを十全に言いうるということ、おお、…こうしたことはなんとまれにしか、どれほどほんとうにまれにしか、生じないことであろうか！ …人がそれ以上付け加える言葉を一語も持たず、それでいて喜ばせ、満足させる唯一の語がまさにアーメンであるというふうに、そのようにアーメンを言うということ、こうして…人が、すべての彼の弱さにおいて、しかるにまたすべての彼の希望において、神の前で透明に自己自身になったのだ、と十全に言うということ！ (Pap. IX A 24.)

ここで言われている「十全」な「アーメン」を、キェルケゴールは 1848 年 6 月下旬から 7 月上旬のものと考えられる日誌の中でついに表明するのである。

わたしはほとんど、アーメンを除いて、それ以上ただの一語も言いたいとは感じない。というのは、摂理が私に対してなしてきたことに対する私の感謝の念が、私を圧倒しているからである。…私はまったく文字通り、神とともに生きてきた、人が父親とともに生きるように。アーメン (*Pap. IX A 65.*)。

ここ(日誌では *Pap. IX A 64-75.*)にキェルケゴールは、自らが「反省のあとの直接性」としての罪のゆるしの信仰のうちにあることを、実存的に体感するようになる(信仰的突破)。罪のゆるしの信仰が、キェルケゴールに確実性をもって現われるようになる(「…おまえ [キェルケゴール自身を指す] がそこにおいて罪をおかしたすべてのことは…イエス・キリストによっておまえにゆるされたのである」 *Pap. IX A 64.*)。

この信仰的突破は、罪のゆるしの信仰への到達を目指して、人間の側からの限界に達したキェルケゴールに、摂理という神の側からの原理が作用したことで生じたものと考えられる。具体的に言えば、これまでの生において苦しみ他にないものとして考えられてきた「絶望の罪」(憂愁、内閉性など)のゆるしを求めてきた結果、それらが摂理という観点のもとに肯定的に捉えかえされたこと、否定的に(「絶望の罪」として)感じられていたあるがままの状態が肯定的に受けとりなおされたことにより生じたのである。以下の日誌にそのことが記されている。

…私の生のすべてにおいて憂愁が存している、しかしそれもまた、描写できないほどの救い [Salighed] でなのである (*Pap. IX A 65.*)。

こうした憂愁、こうした悲しみの巨大な持参金、そして憂愁の老人によって育てられたひとり子どもとしての、もっとも深い意味における哀れさ——そしてあらゆる人を、あたかも私が陽気であるかのように騙すことができるという、私の生まれつきの名人芸 [内閉性] ——そして天におられる神が、私をそのように助けてきてくれたのである (*Pap. IX A 70.*)。

キェルケゴールは信仰的突破の胎動期において、罪のゆるしの信仰を求め、それを「反省のあとの直接性」(Pap. VIII 1 A 649.) へと至ることとしてとらえた。到達される直接性を、はじめは「時間において罪が神によって忘れられるということ」(同) と理解しようとしたが、そのような理解がじつは不可能であることに気づいた (Pap. VIII 1 A 663)。その後の再考によって、罪のゆるしの信仰は、人間にとっては、直接的確実性のない「賭け」(Pap. IX A 32.) とも言われる道を往きつくすことでしかありえないと理解されるようになった。そして人間がそうした道を往くときに、神が、信仰の確実性が、逆説的に「輝き始め」(Pap. IX A 34.) する。自らのあるがままの状態が、神の摂理のもとに、肯定的な意味合いを帯びて捉え返される。それこそが「反省のあとの直接性」としての罪のゆるしの信仰なのである。キェルケゴールはこの信仰へと到達し (信仰的突破)、憂愁・内閉性という「絶望の罪」と見なされた自らの従前の状態を、摂理のもとに肯定的に捉え返したのである。

こうした新しい次元の生へと至ることで、キェルケゴールは今後の自らの課題を明確に知ることになったものと考えられる。

…いまになってはじめて、私は、すべてが私にとって明らかとなる点に到達した。…私の課題が私にいまや明らかなのである (Pap. IX A 71.)。

重要なのは、キリスト教を改訂すること以上でも以下でもない。重要なのは、1800 年間で、それらがまったく現存していなかったかのようになり、取り除くことである (Pap. IX A 72.)。

この課題は、最終的にキェルケゴール晩年の「教会闘争」として遂行されたものと考えられる。こうしてキェルケゴールの 1848 年の信仰的突破は、上述してきた内容であると同時に、1848 年以降のキェルケゴールの生の方向性全体を規定することになるものと考えられるのである。

### 3. 本稿の寄与

以上、キェルケゴールの1848年の信仰的突破について、ひとつの可能な解釈を提示した。最後に、信仰的突破についての先行研究の見解を考察し、本稿の提示した見解と対比させることで、本稿の寄与を考えてみることにする。

大谷愛人は、『キェルケゴール著作活動の研究』（後篇）のpp.1443-1451において、「1848年4月19日における『私の本質の変化』」と題して、1848年4月19日の日誌記述（*Pap. VIII 1 A 640*）から同年5月上旬のものと思われる日誌記述（*Pap. VIII 1 A 648*）について、考察を行っている。

大谷愛人によると、1848年4月19日にキェルケゴールに「信仰上の決定的な変化が起った」（p.1447）。そして大谷はその変化を次の三点に要約する（pp.1447-49 参照）。

- 1) キェルケゴールの隠蔽性、内閉性が打ち破られたこと。憂鬱（*Tungsind*）を神から与えられた恵みとして捉え、それを積極的に受け容れ、用いようとするだけの信仰的に和らいだ状態に達したこと。
- 2) キェルケゴールが罪のゆるしの信仰へ達したこと。
- 3) その信仰において、キェルケゴールは、第二の直接性（反省のあとの直接性）という立場に達したこと。第二の直接性とは、「罪の赦しの信仰を受取ることをこれまで妨げてきた彼の憂鬱が全て克服されたのではなかったが、しかしキリストが単独者の生存に対して中心に立っているような別の直接性」（マランチュク 1984, p.352）のこと。

1) について、本稿では、内閉性は憂鬱とともに「絶望の罪」の一形態と見なされ、内閉性を打ち破る試みは座礁したものと考えた。それらがともに、最終的に罪のゆるしの信仰のもとで、肯定的に捉え返されたものと考えた。

2) および 3) について、信仰的突破がキェルケゴールに、「反省のあとの直接性」としての罪のゆるしの信仰への到達をもたらしたという重要な点

で、本稿の見解は大谷の見解と一致する（この点にかんしては（橋本淳 1976, 1991）も同じ見解である）。本稿ではそれに加え、キェルケゴールが到達した「反省のあとの直接性」としての罪のゆるしの信仰がどのようなものか、それを求めたキェルケゴールの内面的苦闘を追うことで、可能な解釈を提示した。

全体について、本稿では信仰的突破を 1848 年 4 月 19 日 (*Pap. VIII 1 A 640*) に生じたものとはせず、同日を契機として同年の夏近くにまで及んだ一連の過程の帰結として考えた。

本稿は、2006 年 6 月に行われたキェルケゴール協会第 7 回学術大会においての研究報告の原稿を加筆訂正したものである。

## 参考文献

- 大谷愛人 (1989, 91) 『キェルケゴール著作活動の研究』前・後、勁草書房  
橋本淳 (1976) 『キェルケゴールにおける「苦悩」の世界』、未来社  
橋本淳 (1979) 『逍遙する哲学者—キェルケゴール紀行』、新教出版社  
橋本淳 (1991) 「キェルケゴール—懺悔者の道—」、『キリスト教文化学会年報』第 37 号、pp.15-23  
武藤一雄 (1967) 『キェルケゴール』、創文社  
G. マランチュク (1984) 『キェルケゴールの弁証法と実存』大谷長訳、東方出版  
Cappelørn, N. J., Garff, J., Kondrup, J. (2003) *Written Images, Søren Kierkegaard's Journals, Notebooks, Booklets, Sheets, Scraps, and Slips of Paper*, tr. by Kirmmse, B. H., Princeton.

(すずき ゆうすけ・筑波大学)